

北の子

浜岡北小学校だより 令和2年度8月号

＜学校教育目標＞

「たくましさ」と「思いやり」で未来をつくる子

＜重点目標＞

進んで関わり 認め合う子

ピンチをチャンスに～「主体的・対話的で深い学び」の修学旅行～

本年度の九州の記録的な大雨や新型コロナウイルスの感染拡大に象徴されるように、予測困難な非常事態が毎年のように起きています。私たち大人は、自分自身がそういったことに立ち向かうと同時に、子どもたちに対してもただ「守る」だけでなく、将来様々な困難に立ち向かいながら明るい未来を創っていくために必要な資質・能力を育んでいく責任があります。

学校では、新型コロナウイルスの感染防止と教育活動の両立という難題に立ち向かっていますが、大きな課題の一つが修学旅行です。本年度は、東京に行くことができるかどうかもわからない状況からのスタートとなりましたが、「ピンチはチャンス」です。「候補地を自分たちで考える主体的・対話的で深い学びの修学旅行」にするという発想の転換で子どもたちをより成長させるチャンスにしています。

7月上旬にまず「修学旅行」という言葉の意味と「どんな修学旅行にしたいか」ということについて話し合いました。子どもたちからは、「修学旅行は、学びを修める旅に行くこと。そのために『思い出になる』『マナーを守る』『けじめがある』などが大事。」という意見が出ました。この話し合いが、その後の様々な話し合いに生かされます。以下は、その例です。

- ・スローガンは、「おまけ（思い出・マナー・けじめ）」の「修学旅行」にする。
- ・目的地は、ただ「楽しい所」ではなく「学びがある所（歴史・科学等）」も考慮して決める。

候補地については、まず近隣県で「愛知県」と「山梨県」のどちらがいいのかについて話し合いました。子どもたちは、教師が提示した「見学候補地リスト」や自主学習で得た知識、両県の「新型コロナウイルス感染者数の推移」「気温・降水量」「ホテルの数」など複数の資料をもとに激論を交わしました。

その結果、話し合いでは、以下のような素晴らしい表れがありました。

◆内容面

○常に修学旅行の意味やスローガンと結びつけて意見を言う。

- ・「学ぶ所が多いから、愛知県がいい。」

○様々な資料を比較材料にして判断する。

- ・「一日ごとの感染者数は、愛知県も山梨県も最近少ない。」「しかし、愛知県は過去に多いときがあったので、心配。」「それだけに、今はしっかり対策をとっているのではないか。」

○他の教科の学習を生かしたり、修学旅行を教科学習に生かそうとしたりする。

- ・地図を使って距離を測る。（算数「縮尺」）「〇から△までと△から□まではそれぞれ10kmくらいだから、移動時間が少なくて済む。だから、愛知県の方がいい。」
- ・「城が多い愛知県がいい。（愛知派）」→「でも、城は大人向けでは。（山梨派）」→「興味が無くても、城を見ることで興味を持ち、進んで調べるようになるのでは。（愛知派）」

○劣勢になっても、めげずに納得させるための効果的な理由を考えて自分の意見を主張する。

- ・「武田神社は、多くの武将に敬われているから、それだけすごい所ということ。（山梨派）」

◆態度面

○激論になっても、感情的にならずしっかり相手の話を受けとめたいうえで自分の考えを言う。

○全員の前で自分から進んで言えない人を後押しする助言や励ましの言葉を送る。



この後、県内についてもどかがよいのかを話し合いました。しかし、これらの話し合いから約1ヶ月経過した現在は、感染状況が大きく変わっています。今後、子どもたちの成長と思い出づくりの両立が実現できるように、子ども、保護者、学校職員の三者が一体となって取り組んでいきたいと考えています。

（校長 北原 弘明）